

前回は「壱岐の畜産が“兼業”で支えられている」ことを少し述べました。このことは、北海道のしかも私が居た（11年ぶりに今居る）環境からは真逆の畜産形態であり、本当に不思議な世界に迷い込んだ感覚でした。しかも、診療所が「壱岐市家畜診療所」という公務員体質のものでしたので、ほとんど疲れることもありました。九州というだけで封建的な考えが一般的です。それが“離島”ならさらに強固なものになります。例えば、私に宮崎大学から蹄管理の講演依頼があった時、所長殿に「宮大から講演依頼があったから〇月×日に行ってきます。」と告げたならば・・・「それを決めるのは君ではない。だいたい、あんたは割かし有名だそうだが、わしは知らんから・・・。」となるのです。ですから、講演依頼が来たら、「大体の日取りは決めておいて、先方には、私は知らないことにして所長殿に先ず連絡したという体裁を取る」ことにしました。他にもたくさんの儀礼（根回し）が必要でしたが枚挙にいとまがないので割愛いたします。

封建的であることで進歩の度合いが減じられることは間違いないのですが、他方壱岐のような高齢化が進んだ地域においては仕方のないこととも言えます。右の写真は2月に一度開催される家畜市場の一コマですが、明らかに高齢者の多い景色です。実は牛をセリ場に連れてくるにあたっては、JAの存在なしには行えません。毎月JAの指導員が牛を点検しに全農家を回ります（我々診療所の獣医師も同行します）。どの牛をセリに出すか、どの牛を去勢



壱岐市家畜市場の風景
(壱岐市長のブログより)

するか、ワクチンは・・・など、ある意味周囲が主導となる場面も多く、とあるJAの若手指導員は、「じいちゃんばあちゃんには牛を飼ってもらっている。」と言っていました。兼業の高齢者による小規模（1～10頭）が主流の農家は、いわば「ホビーファーム」です。しかしながら、実は、日本の和牛文化、和牛の世界を支えてきて、今でもある意味主流なのは九州や本州のこの方たちなのです。田畑を作り、収入はそこそこでも堅実な家族経営です。しかしながら、一方で農家戸数ばかり多く（壱岐島には800戸の農家が、約7,000頭の和牛がおり、獣医師は10人体制）、なかなかまとまるのが難しいし、いわゆる技術指導も行き渡らない。ある意味素人集団ともいえます。ある時難産で出向いたとき、それは逆子でした。そこのおじいちゃんが、「ワシは牛飼い30年やっとなるが、逆子は初めてじゃ。」とおっしゃる・・・そこには3頭の牛が居たので、1/3×30で、ほぼ1%となりますが、これが100頭規模なら年に1頭になります（実際にはもっと多いでしょう）。余り少ないなら、それを覚えて対処するよりも専門家に任せた方が確実でもあります。ですから、壱岐では難産でなくてもお産で呼ばれることも普通でした。まあそうやって安定的に「牛を飼っていただく＝文化と経

済を堅持する」ことを行うのだから。。とつくづく感心しました。

ところで、私が7年半の間に受け持った100近くの農家の中でその期間に13人の方がお亡くなりになりました。一人は私と同年代の女性が脳腫瘍で1年半の闘病をなされましたが、他の方は皆80を超えた方々で、元気に農家仕事をされ、入院されてからほぼ1カ月以内に旅立たれます。しかもその1カ月の間も、「牛はどうしてる〜？」と牛の心配をされているそうです。私の母は7年余り病室の天井を見て逝きました。私は、母のこともあり、「痴呆」について少し学びました。いくつかの本に、「犬猫、金魚、草木でもよいから何か養うことは予防・改善策になる」と書いてあります。であれば、牛を飼う方がよほど良いに決まっています。なぜなら「世界経済の中に居る」からです。人間として生きていく中で、“自信”はとても大事です。そのようなご両親の最期を看取って、戻るのがなかったはずの息子さんが、我が家の牛をそのまま保留して飼養する後継者も多くおられました。定年後60歳から80歳までの20数年間の循環農業もあるのですね〜



いろいろ おばあちゃんたちの
葉っぱビジネス (単行本)

吉岐で出会った楽しい方の中に「横石知二」さんがおられます。もう20年以上前になりますが「葉っぱビジネス」という言葉が流行ったことがあります。和食のつま(ササやカエデやナンテンなどを栽培し収穫し卸す仕事を、徳島の上勝町という全くの山間の村で興した話です。200戸の集落は潤い、視察団が今でも列をなし、若者も集まっています。吉岐の方にもご紹介したくて、吉岐テレビに問い合わせしたところ、「あなた自身で声をかけて呼んでください。手伝いますから。」と言われて、飛び込みで横石氏ご本人にメールと電話で問い合わせしたところ快く受けてくださいました。そして実際に吉岐に来て

講演されました。さらには、半日間私の診療者に乗って農家回りしてくれたのです。その後の予定を伺うと、2週間後に「ブータン」で同じ話をする事になっているとのことでした。“幸せの国”と呼ばれる国で・・・幸せに暮らすこと、しかも最後まで・・・これは我が国においては少子化の裏テーマとして今後ますます大きな問題となります。具体的には痴呆対策・尊厳死などにも繋がるでしょう。

高齢零細兼業農業と、大規模専業農業とは真逆ではありますが、素人同然の従業員教育を含めた人手不足問題や嫁不足問題を含めた後継者問題など同一線上の共通項が存在します。また、地域全体を(例えば吉岐島全体を一つの農場と考えて7,000頭牛群として考える、「島ぐるみの牛群管理」などもテーマかな、など考えております。今回はこの辺で・・・

横石さんには良い話をたくさん聞けたのですが、それはまた追々に。

人も牛も怪我や事故にお気をつけて、牧草収穫時期を乗り越えましょう。